



十一條目錄

- 一五折五行花形之事 十一
- 一花形りの事 十二
- 一花器地火刀割之事 十七
- 一蟹五徳と花ぬき之事 二十二
- 一花形りの事 二十四
- 一花種に扱之事 三十
- 一花形りの事 三十四
- 一左右系左右枝之事 三十五
- 一平美もの事 三十七
- 一花形りの事 四十

ツキ(九)



陰陽五行花形之事

○古法眼是公軒一為存生口傳云云五折五行花  
 正花を二花の相あひまよりて皮かわの更または陽をさるる  
 今を正花乃小枝を正花二折之趣々盛をす  
 枝を表して中央の玉より陽中の陰をさるる  
 この由より枝形記略をさるるを切株の趣々  
 原曲と形したる事と今此之趣々するに陽中の

昭和十六年一月十一日  
尾野貴英氏贈

陰をさるる也云花乃後をさるる刻之方（何處）  
明らるる姿を振るて働く之通用を一花の用  
みして肉の厚りをさるることを用ひて一花の  
裏より角（姿）を振るて働く也体を一花の  
体より骨之陰をさるる一花の表より角へ  
姿を振るて之角の形を明らて働く之姿を  
体の小枝をさるる一花之陰中の陽のふらとさるる

ツキ⑩

之の由は之を枝の形をさるるをさるるて体の  
小枝をさるる姿をさるる也  
形を云ふの花形を陰陽中よりさるる又付て花  
形は用ひて之を刻を付て花の形をさるる通用  
の花形は花腰（わたり）て之角の形を体よりさる  
是れ一花形用する曲尺合の之角を陰陽中行  
之形合する之角之の之角の体よりさるる

田成するをよの正格乃秘傳なりと云ふ

花配の事

○五折五りの口説居仕法國の門社と傳へて授の傳  
卷を附録し執心の門人一を門月を五折をお積  
のたぬ折角此許のを附与勢らまはるここの事  
折月半古流移交弘まきり終るよ法國の門門  
たる人折花配り杯の遣ひ方平 古事を月へる

ワキ(土)

流美乃花乃を規おふ要友よ何まの國を由  
五折五りの口説居仕法國の門社と傳へて授の傳  
卷を附録し執心の門人一を門月を五折をお積  
のたぬ折角此許のを附与勢らまはるここの事  
折月半古流移交弘まきり終るよ法國の門門  
たる人折花配り杯の遣ひ方平 古事を月へる

以上陰陽の二性を定めたることはその規あり協  
 ありありなる花の用ゆるを高くし  
 選の方より簡易なるを好みたること  
 彩云花の配りの選ひ方よりして正通体と系  
 きの節もあまたの根本を混する之花の配り  
 て正通体の枝葉の差を混する之若上手  
 又生成りたりとも土より生ずるを肝要とす

ツキ(十二)

正しく根本の差を混する時は花の配り枝葉  
 を混するは理ありて正しくこと  
 〇根本を混するは正しく正しく正しく正しく  
 正しく正しく正しく正しく正しく正しく正しく  
 根本を正しく正しく正しく正しく正しく正しく  
 混し或は余草余木を根本とす正しく  
 て正しく正しく正しく正しく正しく正しく

魚一匙して花を咲かす際を木を根を根と  
思ふか木の根を根と根を根と根を根と  
根と根と根と根と根と根と根と根と  
何ともよくこそ根の分まを付てこそ根を根と  
之の分まを根を根と根を根と根を根と  
拾削て外の根を根と根を根と根を根と  
建ひ方み方とこそ根を根と根を根と

ツキ 十三

味のある事への傳

○一為君士徳國に流美を弘めらるる事  
お生に修傷するの規おおしむ後して  
余は事とて廣くお根を根と根を根と  
その由よおしむの事を許しておしむ  
いも意味の通ることを用ひた

○君士徳後大板飛脚を西國中國九列お方へ

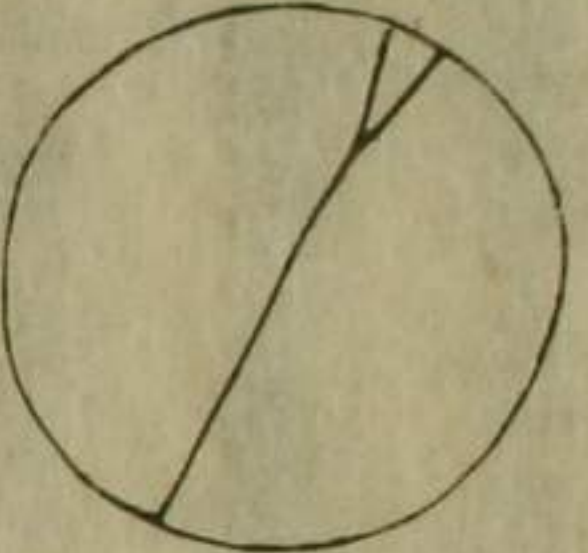
もむたり流を弘むる之を列を修る島津之  
三列を富公雁ノ形南勢山田之形修館之國之近  
國を修むる之も要也といし西丹由  
紀之形を流を流て東府の方まで弘むる之  
又法國より古流ノ之道を立て流を弘むる  
人多し之より初月半古流といふ流も川流  
是も川流して法近廣といふ一形を在的傳の

ツキ

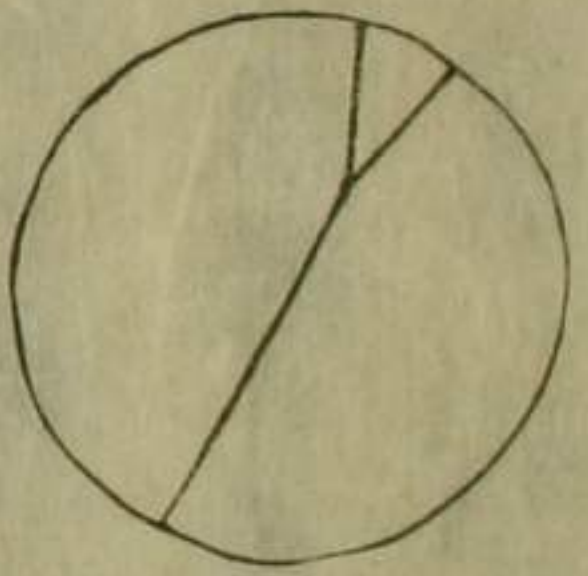
十四

門人たりといふもこの形をそむ得たる人を此  
より言ふ形より花形からかこ遠の方の事乃理  
よ協くする事何る也一平高の事も自らの  
癖を是として其形乃花形を用ひる人  
若上子の形は形はハ詩してみる事あるべし  
○形云法國より流を多しといふも所傳を多しといふハ  
形事之縦合門川乃宗匠たりとも形の傳を用ひ

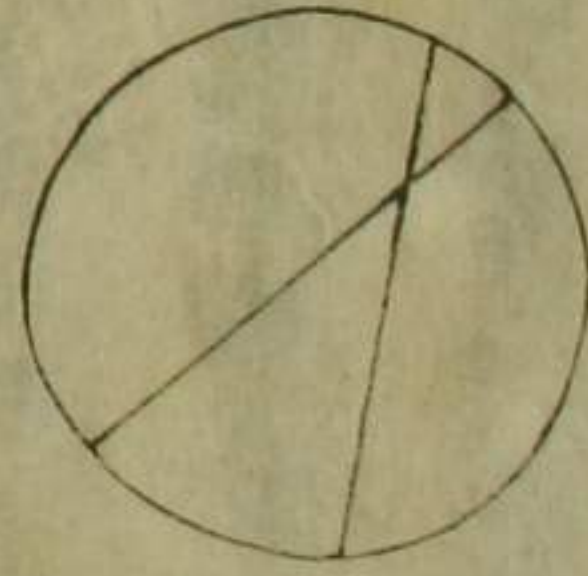
廻りまゝのこゝろに字を添へて失んじとを本とせ  
用ひたる花破りの違ひくゝを因習り



割接



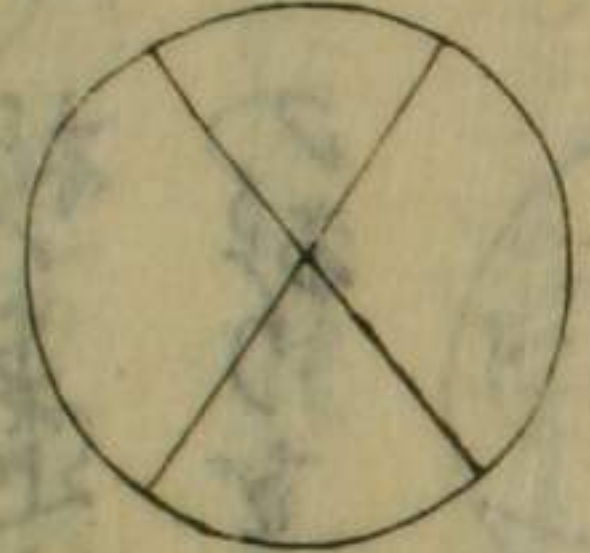
二膝



指膝

○ぬ国割接二膝指膝の花破り口流の内を  
所及せしこゝも昨傳を花共は割接一文字の外

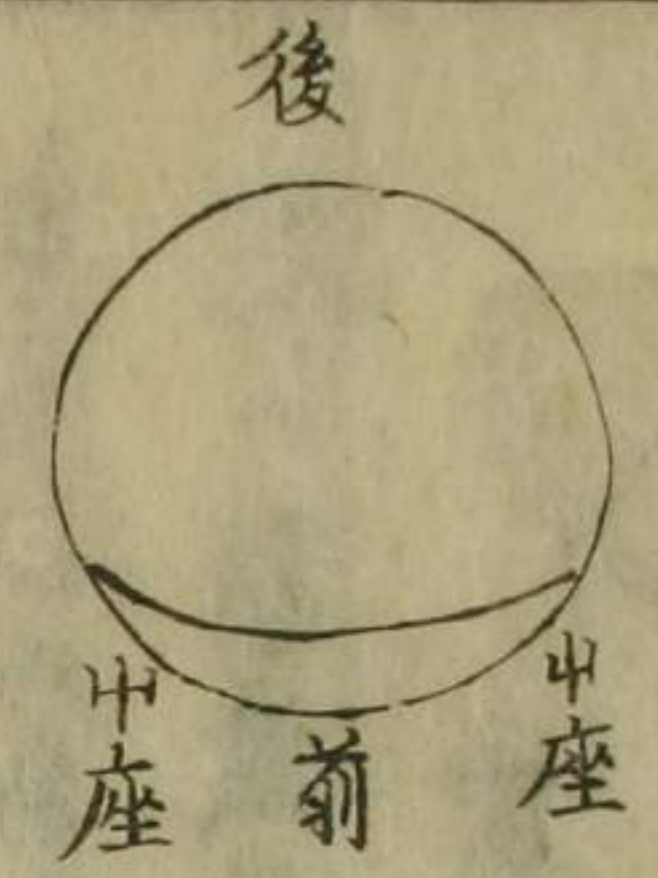
を用むらゐの瓶の中よみくゝを婦よ意味は  
由よ割接二膝指膝分こゝを違ふ處り守又



ぬ国十文字の破りを違ひて字を花を  
たるも見たり傳よ云十字を二地  
中央より出せしるを本脚之様を  
花を瓶の中よ鑄りの事と婦よ之の  
字の花破りを違ひて字を花を



るを本意とし句の一字を移りてを花忍の藤引  
 付て力あを花忍の内(一字の移りけみ)を  
 梅は遠くをこつと傳へ一字の移りを遠く余  
 の移りを遠くをこつと傳へ



中座。如圖一字乃移りを藤引付花忍  
 前乃前の方ニケるとは單乃座に定  
 めて花の座より移りてを定む

する如くの一文字乃遠む方を常流の作傳を  
 花忍乃藤引付と遠む方を常流の作傳を

○上は同字より割接ニ膝指膝の花忍りを花忍  
 花忍は向付と遠む方を常流の作傳を  
 のれ方は向付と花の指の移りてを常流の作傳を  
 梅は成すなりと移りてを常流の作傳を  
 梅は成すなりと移りてを常流の作傳を

此事を入門の形の花器割の口説を以て傳授す  
 りふし花乃の規制は一巻のみたりこの更  
 新形は後より寸のみならず規規分毫ハ  
 寸名分記之若き様是形は花器を造る  
 者忠を辨へたるべきを造る

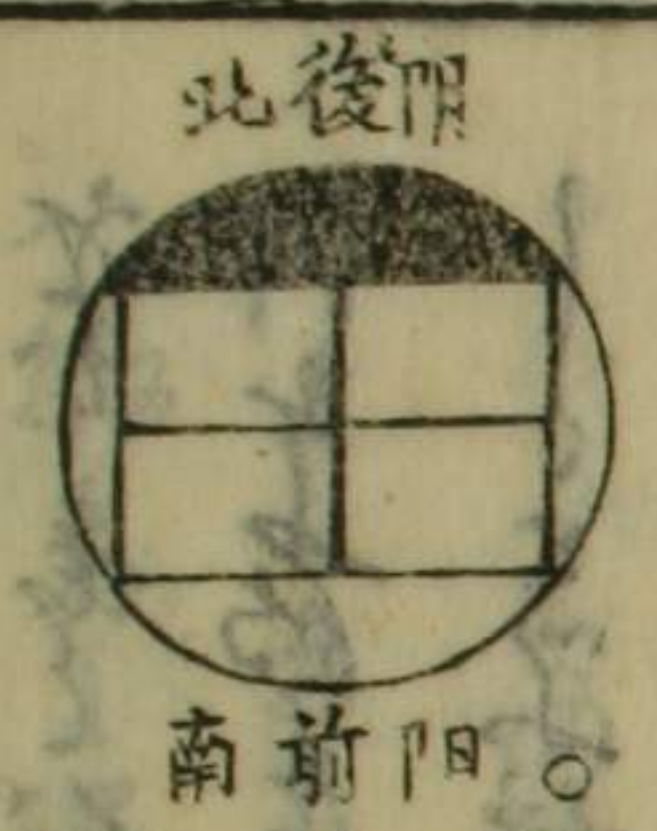
花器地大規割之事

○花器地大規割之事

ツキ 十七

ありたるこの形意はよし門高花器を以て  
 事悉くみかす傳事

○又傳云獅子口の花器を信陽中より二巻を以て  
 て花器前二巻を以て花器を生ずるを造る



獅子口は圓の如く割を付たるを地の  
 形を以て之を以て花の割とす之を以て  
 を付花器は字より花器を以て

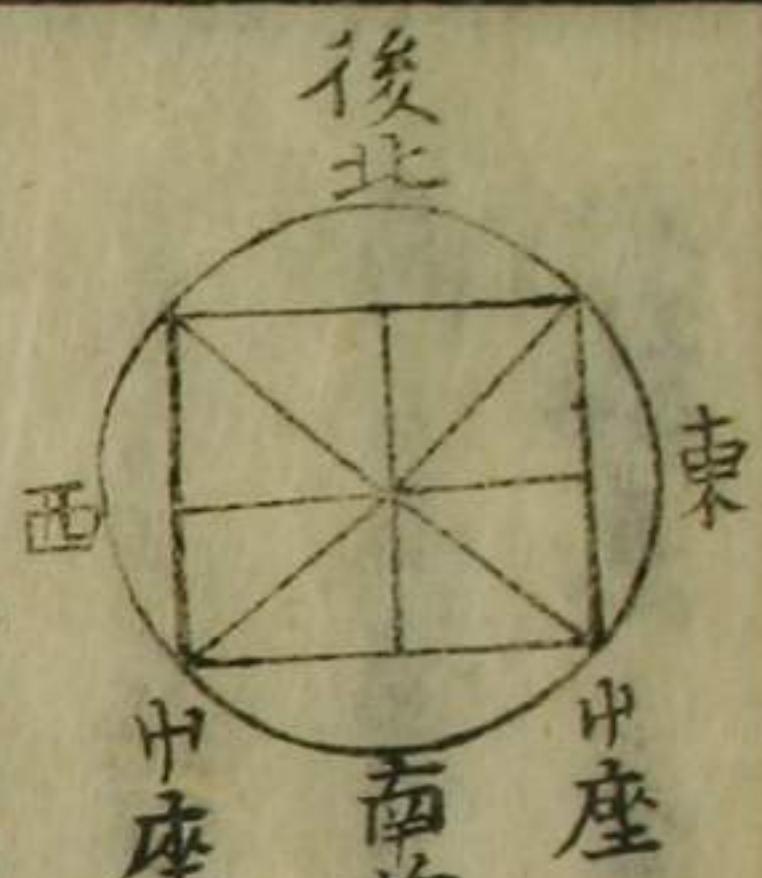
ツキ 十六

と申す意と心得十文字或を割換るの花起り  
けり高き花起り花天つは字の歸りて何  
しと云ふ傳やの也は横一文字の起りを意ひ  
花天つは因みくね極は前引付力本の花本  
せしと云ふ花定めぬくしと指を床の因(指)  
込て坐るや

○花お坐る座を信陽のニテ書と除くこつしよ

ツキ(大)

意味と云傳よ云信とわし陽を當このニ方を  
除きて前角ニテ書と花の座とすは起りを  
花を何事も陽は角よりお坐るしる乃理起り  
こみ也よ花起りを建てる座を一文字の卵を建てる  
つたきこの又掛花を中座に掛りて花天つは因  
みくねと云ふも花起りのをひ方お座しと云ふ  
ハ起るよ背くしと云ふ



○花器の傍偏の二ヶ處を際くこ  
 南前すゝめくハ境を付て地内  
 形寸二の割の東西より行草の座と  
 角を爲す座を定め花を置する也  
 刻の事初傳口説の二卷より十  
 五條花器刻の  
 事よりあしく演るるも一割換  
 十文字杯とあ

ツキ丸

ツキ丸

○花器の傍偏の二ヶ處を際くこ  
 南前すゝめくハ境を付て地内  
 形寸二の割の東西より行草の座と  
 角を爲す座を定め花を置する也  
 刻の事初傳口説の二卷より十  
 五條花器刻の  
 事よりあしく演るるも一割換  
 十文字杯とあ

種々極々入花を造るは花のありて極は  
極たるもの形を八何を用とるる一か  
きひ極も花のあり極もきひ必すめを以て極は  
きさる功者よとすをよ極とす

○この極用ま介の度中を花をよりくするものを用  
中ら花を物に應して許すことある一若し極  
五徳等の花を造るはさつを量極割披二勝十文

ツキ二十

字杯の花を造るはさつを量極割披二勝十文  
さつとつうをさつとつう花を造るはさつを量極割披二勝十文  
寸是寸とさつとつう

解五徳と度口の花をよき事

○度口の花をよき事解五徳を系湯又用  
ゆり蓋並に座席の二身よ花をよりくするは物  
用はよき蓋並に花をよき事ひ花をよき事

客を長懸したるものなり一一人のきひをいめて  
花をよきものなりと誰人もあらずして度は  
よのなるを解き五徳をきつや

○廣口よ花をきつことと中右の他をよき  
を水よこのなり一あらずして中右の利休高きと  
茶花乃き人一事を頓他なる人よその持用を  
よの蓋よきと解き五徳を花をよきと花

ツキ (三十一)

と坐して太閤君(美濃)よ入しらきたるう度はよの  
花をよきものなりとよき一よりのなりとよきを  
よきとつや

○馬盤よ書を組んで花をきつこととよき一よき  
一太閤君(由系)陳乃の政花を扱けたる人  
て利休よ命して坐すことと陳中の事解きよき  
よきをよきものなりと盤よ書を組んで花をよ

貴後に入らましより書と花をよ用申す  
 るにのみと名付書と組んで花をよまうこと  
 ありありとよまう寸中た利休居士の爲  
 ありして今の世の人書を花をよまひ花とよ  
 なるよ二ツの書と書とよて生たうとる鹽とよひ  
 解五徳とよて生たうとる度戸とよつや又云度  
 之上に書よ並ともやうーかす寸馬たりぬを下

ツキ (三)

度よ並にさうたるぬとよま書味ありぬ  
 〇新よ云度はどの生方を中たの他爲よて喚他の  
 今茶湯の蓋並よま解五徳と茶湯の物  
 よ用ひて花を生たうぬとよま書よ蓋並と花  
 ぬよ用ひたる喚化飯面ありとよま書少  
 ぬらと解を花ぬよま書を起し五徳と茶を  
 よま書を起しとよま書を解

も縁起のえみ徳を施すは用ありそのゆへ  
火珠のものことツキとよむ付たる人のツキと  
肩しよ縁よ蓋並を用ひたる形智の他方を  
あつぬ人のツキとゆまは縁うすせと名の縁他を  
あつぬ人の好みたるれも縁のりる花もそと蛇形  
蛇籠ウス回カり謀カふとの縁の解き花を  
ゆひて扱半やこの蛇形蛇籠のたるゆへ

ツキ (三十三)

しとツキよそゆへまらゆこにて扱たる花も  
ゆまは面白きツキの理ゆをゆへすも縁よ蓋並  
を用ひたるも形智の他方をて面白きツキと  
ゆへし利休君をもちたるゆへも縁を組んで花を  
生太閤君は賞讃よへらまたること形智の他方  
を勝またりゆ縁よ蓋並のたるも是よゆへ  
こも席の一真こよこゆへしてゆへも縁を組んで



情の事面白くして

花冠花冠よおんが用捨の事

○花冠をきくと花冠よよめてきつたよその  
あつてきつ細いよその花冠をきくとあつて  
つて花冠は括一括一一寸より一寸四五寸までを  
細くつて花冠をきつ事とをきつて一寸四五  
分より一寸位までを中とつて見るとかきつる標

ツキ 三四

よ花冠をきつ事を許すや一寸位より以上の口の  
廣きものを廣口といふ之を花冠よ括たるもの形  
ハ廣口の花冠といふ一は括用のもの形ハは括  
といふ一花冠よ括たる思物たりとも口の廣き  
そのよを五徳ハ花冠をきひ廣口のよのや方よ  
する事うらう一初寸より括用ハ廣口よ解き  
花冠をきよ括う寸を縁の内縁よ括うをきよ

しりあへり大キ形の解をより花の豆掛渡したる  
をわしこみあふより花用のそのを解をきま  
くす寸こひか大針よき味取し

○移よ云度はそのを改ましくよ用由愈花に花の  
解を五位杯の由よ用む極よ上より下よりある  
よりりよて何も失取し申口かとの花破りハ自  
の纏まりて花器の内（みぐる）くみくね極よ

ツキ 三五

きあししを得るる一花破りのきひ方花突つよ  
よのききひ極のわらそのをよの徳よ花器を用  
むたる花破りよをよを用由そのをみぐるしよ  
しよを評する事ある一この由よ居玉の口後を  
以てまも付らそのやを得る

一花新用枝極之事

○草木とも四方に三方（枝葉を指しておけしん）の

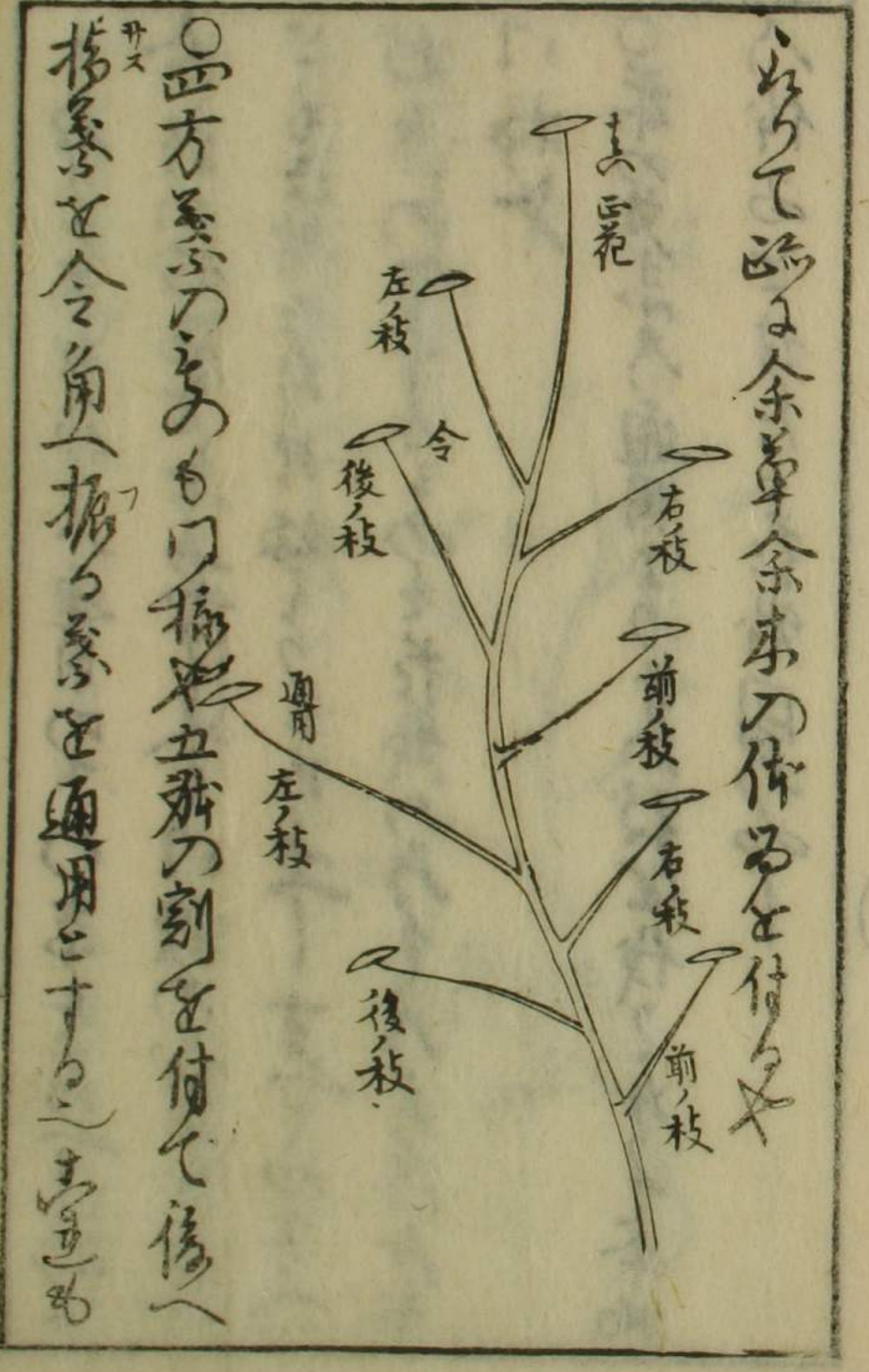
之是を五折なりは割を付らぬを四方系四方枝  
の折を前後左右の枝系をみて五折なりを  
割を付らぬ二方系二方枝乃至の並きものを  
枝系を前後よりみて割を付らぬ魔くとも八た右  
よりみる割を付らぬこの割の付種秘長する人を  
あしく口説を交るといへども初心の内を枝系の  
お折を心得たきまのやよ月も初秘長のため

ツキ 三六

よ四方二方の枝系を五折なりは割標を因する之  
すへる草本お生の事をお生傳よあしくいへども四  
方二方前後左右の枝系のお折ひは疎きを一花  
折用調ひたりといへども當りたるをたすこつて  
若二折之折を組らぬ四方二方一枝系のお生をゆ  
じて五折五折なり多りも練肝要之  
○四方枝四方系五折なりを四方の折之図或る

部すらゝめ一令を後の枝を以て寸通用を右の  
 左の脇(指枝)と通用にする一力少とくは持さ  
 一匠上の右の枝或は一匠上は左の枝と通用は  
 枝のあり一肖て前後は見定令を後通用を脇  
 の角(振ら)と心得其辨の割を付るを二力少  
 差より因する廻り其力少めて四方(枝)の指たる  
 之の形ハ通用は此たる枝より下(枝)をみ分依り

ツキ (三七)



○四方(ま)のまも口振也五辨の割を付て後へ  
 振ると令(角)振らると通用にする一力少也

きろくろとをたたくハ通用の下の葉をみちりし  
 余物の待をききし又一を門種の作をききし  
 とも自然なり候候よりみちりし一すて四方へ  
 枝葉のせしりものを花辨のりきりしをみちりし  
 門種也

○前の身志乃通用より下の枝を伐りたりて余物  
 の作をききたる花辨図の如し

ツキ (三)

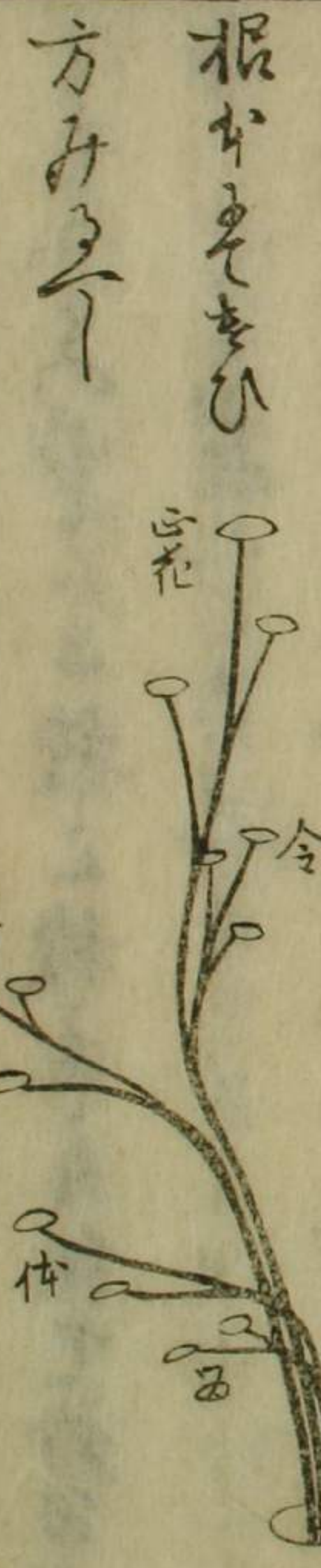
○正今よりす方本  
 ありて通用の枝は振う  
 形くして口亦く又を余物をききし  
 正花乃身志を並ておし守候をききし

みゆる極よき感一又体るよ余のものをきあは  
 根本を混ちすよきて枝こみゆる極よき感一  
 体るよき感一よよりて力木の根をきし極す  
 こいつを嬌ゆとある一をある木の体るよき  
 を生極すこいつとあり一草すれよそを生極す  
 一とあり一を得ある一

○二枝よ一本をよたる根ノリの方を枝破りて之を  
 図

ツキ (三九)

すらゆ一の花を花を花を花のたりの方の角  
 よ花の産をよたる一之花通用体る者々本産  
 よりよよたる図式



花種に扱之事

○二枝二茎をよ一花新用するを本新之表二枝二

於集めてきわむも一種のよの形ハ一花一莖ニ付  
本花の形形ニ付一花ニ付も一種を以て辨用  
しるすの形ハ二種三種を以て辨用す  
魚一をも以て名に付す

○一種一莖を以て陰陽ニ付す各付す  
二種を以て陰陽ニ付す各付す三種ハ陰陽ニ付す  
三花ニ付す各付す

ツキ (三十)

○一種二種を以て二花を辨用するを以て一花  
を以て辨用するのハ花切ニ以て辨用す  
そのハ花切ニ以て辨用す  
よハ花切を以て辨用す  
辨用す  
生るるす

○二花辨用す本花の二種或を二種草との二種或

右之種又亦之草の如く二種或も之種各々花  
 又アウリお生れの如く扱ひあり

○は傳よ云木の正花令一廿一種通用一廿一種体る一廿  
 一種の如く一廿一種を各々花又アウリ一廿一居よりお生  
 する草の草又亦之て正令通用して調ひたる一廿  
 一種は傳よ一廿一種或も草体る一廿一種若れ  
 本を少く花又アウリお生よりお生する草の草

ツキ (三十一)

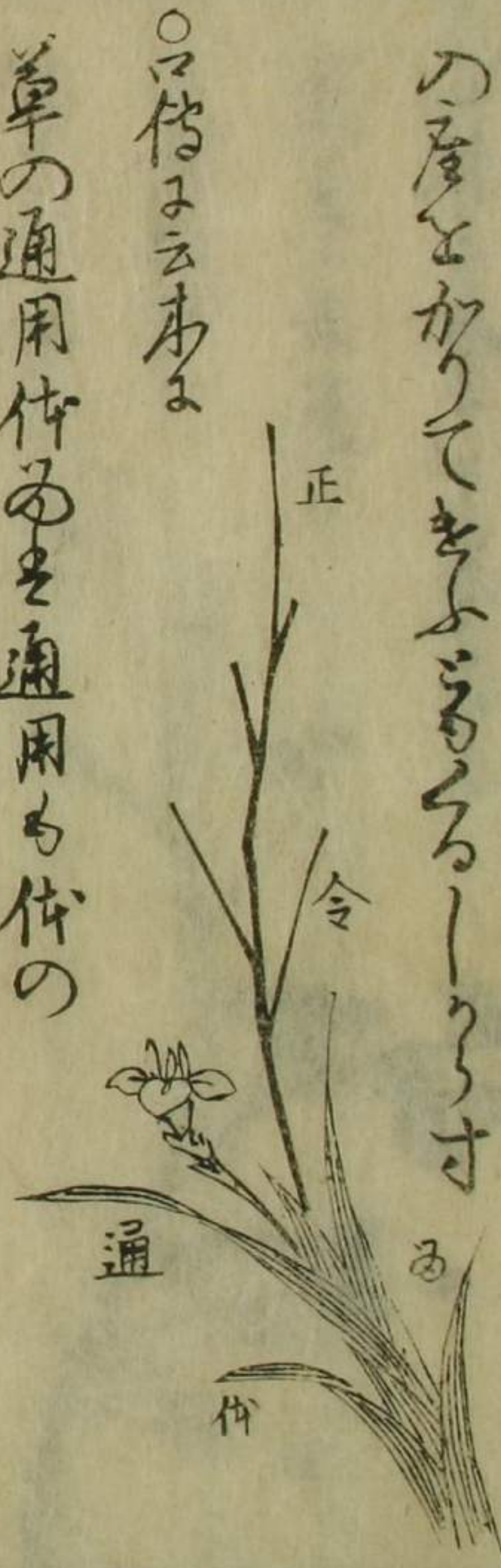
○は傳よ云亦よ木の通用体る二種よて正花別よの  
 如く通用も体の居をかりて一而よを一

同すうりや  
 若れ為別  
 之のよて本花  
 二種よ各々本居より  
 其よと本花別よ





体と通用の枝をけり縁上よりきひぬり所を体  
の産をかりてきふもろるしうす



○口傳云ある  
草の通用体をも通用も体の  
産をかりて体二色をきふ一色は図すらるめ  
若通用体二色をきふも体の産よりきふ

ツキ (三)

○口傳云草は草の通用草の体二種の産を  
きふ一色産よりきふ一通用体二種を正  
産二種の産を通用も体の産をかりて体二色  
をきふ一色は図式の色は木の二色は木の通用  
二色の産を通用も体の産をかりて体二色は  
きふたふらるめ一色は木の産は草の産も  
かりしつる

○移す云々の産をかりて通用と違ふ所を通用  
 を脇振る深あつる所は通用を以て力本を切  
 極よみゆきとも振ふよりたけをよきをひり  
 力本は流すたる枝をみる通用形は八切とハ  
 以てさる之着切こつても七寸五分の割を以て  
 許すこつて

○移す云々の産は草の通用一色草の体は一色

ツキ (三三)

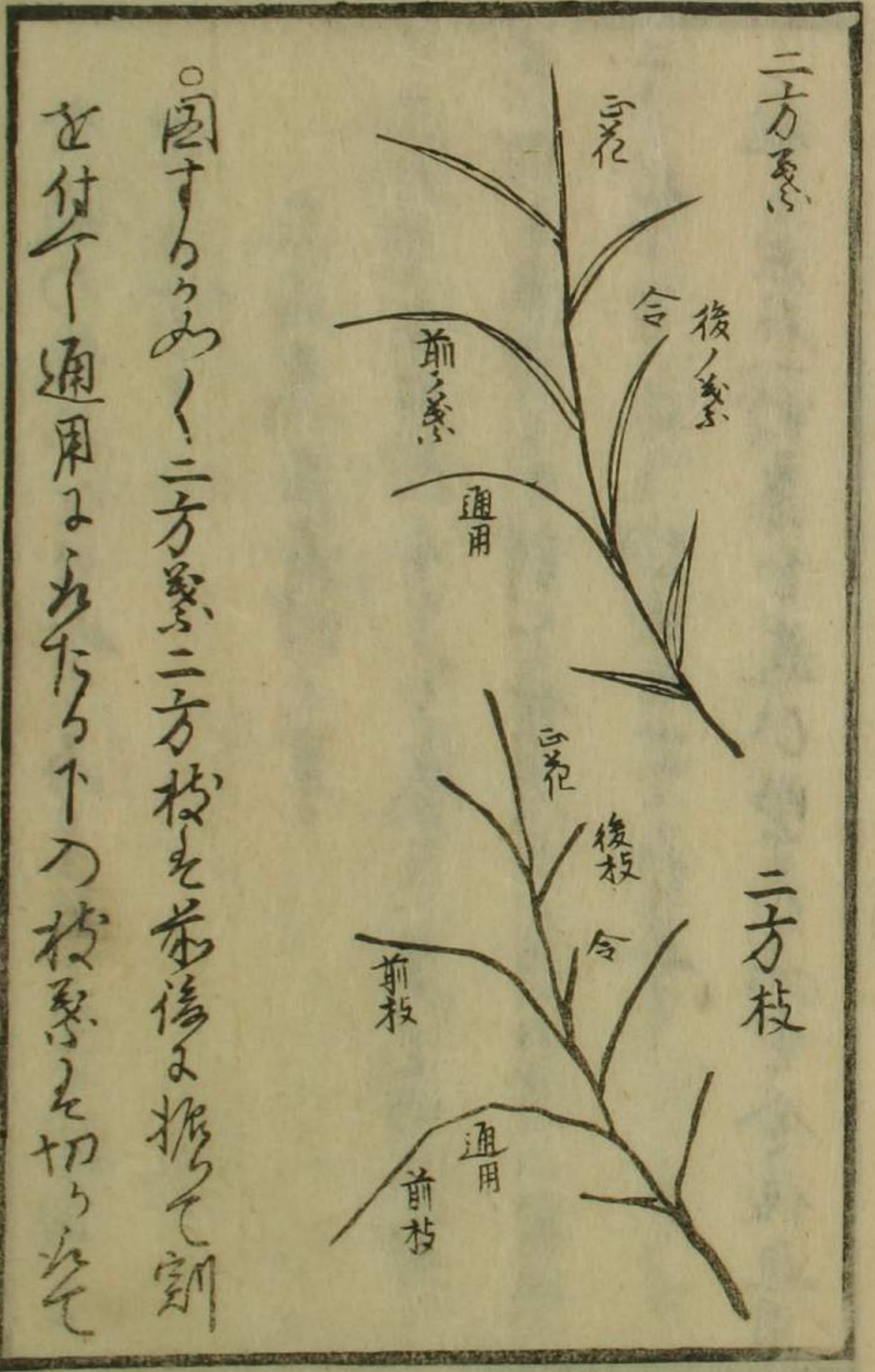
二の二色を以てよく本産よりきよめを振とり  
 のをよめて本を換てり〜縦合通用体も毛  
 加へたりとも通用も体の産をかりてきよめ

二方義二方枝之事

○二方義二方枝の産を以てきよめをすゝめは毛  
 を削きて前後は枝ときよめ〜四六の割を付て  
 後(サハ)接ぎふと令脇の角振る毛と通用とする

之枝をのち二方(枝の半半)を乃るを乃るのち二方  
 美ふのよに一図式のお生をみるべし  
 ○但し枝をのち二方(半半)をのち二方  
 二方(枝の半半)を乃るを乃るのち二方  
 前後をを乃るのち二方(半半)を乃るのち二方  
 付し一なるを乃るのち二方(半半)を乃るのち二方  
 乃るを乃るのち二方(半半)を乃るのち二方

ツキ 三十四



○図すらうめく二方葉二方枝を前後又振つて割  
 を付し通用を乃るのち二方(半半)を乃るのち二方

余種乃御為と付く一乃其能なる方同式よ  
習ふべし

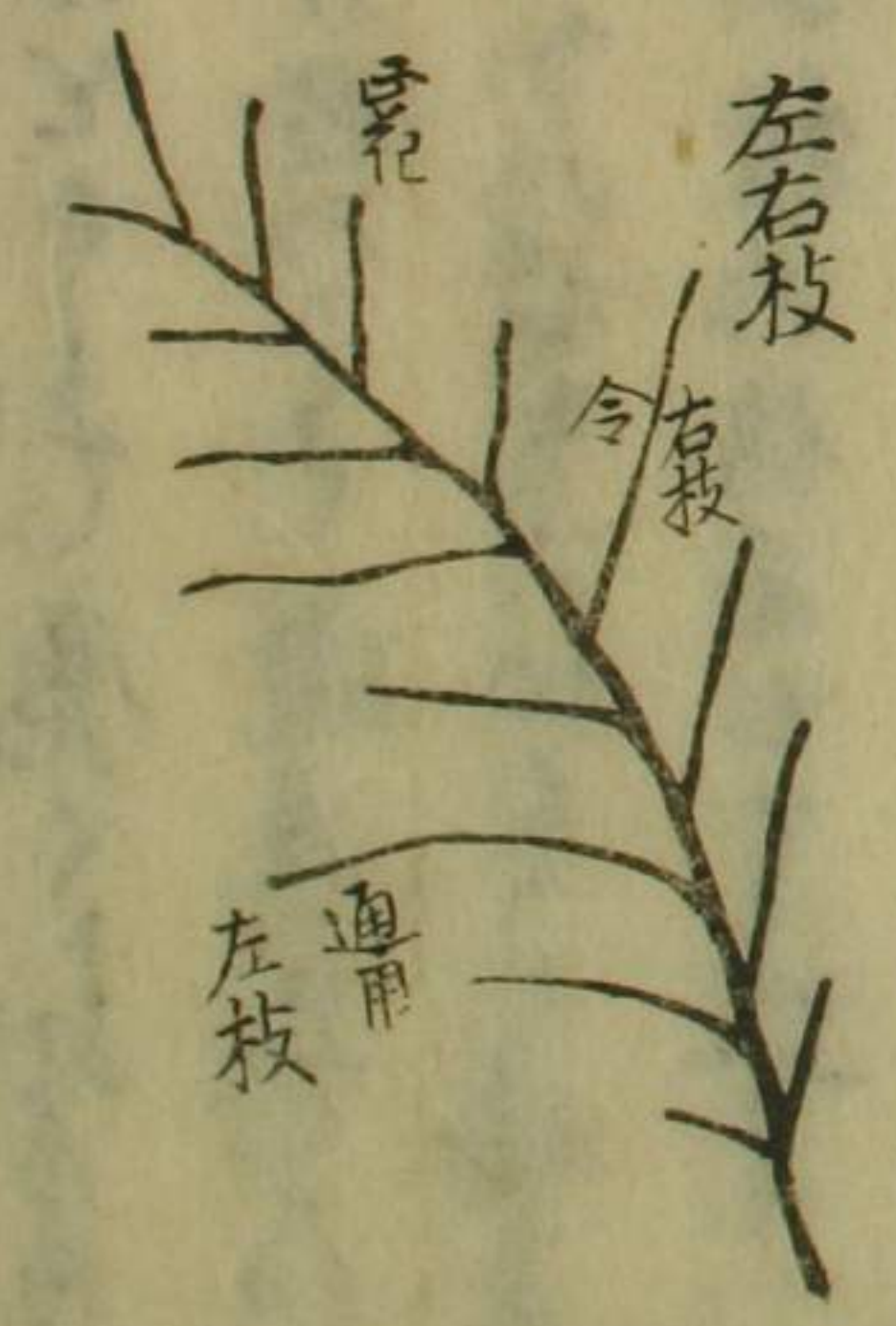
左右系左右枝之事

○左右系左右枝を多分麿きそのよりも  
花形をとりて割を付るを結ぶ方二方系  
二方枝は習ふべし一図式を以てみるべし

○但し左右一様系を造ひ御守をのを令後通用

ツキ 三五

魚振ると造ひ方を形しある之より  
之より自の二層をとりたるは左右枝系を  
さすともるべし



〇 図の如く左右一校をさして麿くおれは  
 之を前の二方並二方校の如く通用して乃  
 乃を定めたるはさ下の校をハ切らざる  
 同種の体あり又を余種の体をもきよ  
 〇 其の草葉も四方二方左右校をさし  
 為との如く草葉の一系一校して乃をさ  
 〇 此の如く傳ふは一系一校して乃をさ

ツキ (三六)

正花乃一莖して令乃校を定めると一系  
 一校の如く通用もさしは門一通用もさし  
 一莖して通用の如く用ひる校を一系一  
 校の如く一系一校に定めたる下の校をハ  
 切らざる如く定めたる一系一校を  
 一校して乃をさしはさ下の校をハ切ら  
 ざる如くたすとの形も初公の人公得よ

手も付らぬのこあしとそ花を忘るる人

平葉のその事

○平葉のその葉子花一八萬花莖蒲或尾刺干  
のちりそ蛇腹お生のもの之葉を左右(形を明す)  
地際をお生する時より其葉を左右(葉の形を成  
してはく盛をして伊りよは月より其葉を葉  
して左右(分を後よ其葉よ編葉を生して

ツキ (三)

花を生するものこまを葉の左右の葉を編  
してお生れ通う葉を組直してまよ之若お生  
葉よ付たる葉扱いたる形よ余の葉を組直して  
花莖の葉よねぬ也



○地際を生する時をここの図のこま  
其葉を倒く形を成して生するま  
ここのお生よ明くして葉を組直して生する也

○葉を左右に生ずるもの令之は後之葉の通用  
 其葉の形を角（振）形と生ずる如く左之葉の生  
 ずるもの形も其葉の形と生ずる如く生ずるもの  
 由（令）通作の依（葉）を以て之を以て之を以て  
 之の二余種の左右枝葉を生ずるもの之を以て  
 之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て  
 之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て

ツキ (三)

正令右  
右  
左  
通用  
左

この図式の通り

○は図の三令通用其その葉の  
 之の葉の生ひ方は生ずるの枝  
 を以て之を以て之を以て之を以て

○ハ或尾生口...  
 ...  
 ...

三十九

二莖之組二瓶を差ひつた此の二のものは一莖  
 二枚の生方と瓶上の花形とツク一或尾を  
 一莖一枚の生方と瓶上の花形とツク一或尾を  
 ○高<sup>アヤ</sup>莖の花の生方と一もを差細くしてお生  
 崩すもの由(莖)の生方と瓶上の花形とツク一或尾を  
 のすし(莖)の生方と瓶上の花形とツク一或尾を  
 此にて二瓶の別を差して生方を二つにすは莖

ツキ (三九)

花は高蒲の極よ今つを花形調ひつたさとの  
 二枚を差して生方を二つにすは莖

○餅干花を牛牛の味を差を大に崩し左左  
 分るこのものは花形と瓶上の花形とツク一或尾を  
 二瓶の生方と瓶上の花形とツク一或尾を  
 此にて二瓶の別を差して生方を二つにすは莖  
 上と下を差して生方を二つにすは莖



きりのすむて平素とのと左右の葉をみて裏  
 のうきを見れば裏をみる極は奥ふくく  
 みる極は成寸口然りと云ふなり

信陽五力に辨花形図式を以て花形を  
 述ぶ方をみる事



○めい山花通用作の二辨を  
 花形横一文字の花形を

ツキ 四十一

述ぶ花形をく一本度より二辨の乃ををわす  
 を根のりの方を図式のことし左花形をきひ方  
 の事を初花形の方より横一文字を述ぶをを  
 以て授するより外の述ぶ方なり花のよ自色の形  
 を以て二辨指勝を十文字割授をその花形  
 述ぶをわし花形の内より花をみるを  
 しそののこきよをくすなり花形を地

意りたる如花破り遣む方よりて地丈の表形  
 を引くところ一この如くは遣ふ處より  
 若花は其の表形を味を辨一すして慢り  
 花破りを用る人をみるはたす一花破用の評  
 議よりよかるところて花破の表形より合さる  
 を縦合儀りをも川の人川才とあるはらも  
 深きよある人乃するところは圓也一す

ツキ 四

とつし



○横一文字をてめり兼るま  
 を割枝を圓のて横一文字  
 字を遣む並引付て花をぬまは花破り  
 割枝のてをすしてみるは花破り割  
 枝のめりもすをてら一かすはとつし一若  
 花のて上りも遣む一

○一文字の花研りて造らうす  
 一割枝の研りて造らうす  
 を大うさこの図の如く花を造る  
 命お付よせぬすも花研り瓶の中へおくは造らうす  
 廣口のものや方よ町りておく若廣口のよ指用  
 ともよそ解き五徳あつた花を研りて造らうす  
 して花研りて造らうすおく下地もよそ割枝を



ツキ 四

何れも指勝又よ十文字と花を研りて造らうす  
 幸ふも指勝十文字も瓶の中へおくは造らうす  
 少くも花を研りて造らうす追てきよ直よ瓶の中へおく  
 けりりり理りておくは造らうす少くも指勝  
 層の如くハ許りておくは造らうす



○よ指用のよの十外廣口  
 ともよそ解き五徳の花を研り

ゆき十文字の破りを圓のつくよ違ふ一ふん  
まことつづきをゆきまきる解き五位の時さゆの<sup>74</sup>爲  
ゆきハ<sup>75</sup>延持するよ<sup>76</sup>許すま<sup>77</sup>つづき

○二膳拵膳を用ひぬりすま<sup>78</sup>つづきを<sup>79</sup>二膳のまきま  
ぬ違ふ人ゆき<sup>80</sup>用ひぬりすま<sup>81</sup>つづきを<sup>82</sup>瓶の中ま<sup>83</sup>拵  
ゆきして<sup>84</sup>自己の<sup>85</sup>心中を<sup>86</sup>塞<sup>87</sup>及<sup>88</sup>理<sup>89</sup>こ<sup>90</sup>ゆき<sup>91</sup>つづきを<sup>92</sup>事  
ア<sup>93</sup>花<sup>94</sup>美<sup>95</sup>の<sup>96</sup>表<sup>97</sup>形<sup>98</sup>ま<sup>99</sup>付<sup>100</sup>て<sup>101</sup>ま<sup>102</sup>き<sup>103</sup>こ<sup>104</sup>ま<sup>105</sup>き<sup>106</sup>河<sup>107</sup>ま<sup>108</sup>ま<sup>109</sup>事

ツキ (三)

あまさうゆきま<sup>110</sup>読<sup>111</sup>ま<sup>112</sup>る<sup>113</sup>守<sup>114</sup>ま<sup>115</sup>く<sup>116</sup>を<sup>117</sup>花<sup>118</sup>美<sup>119</sup>の<sup>120</sup>  
ま<sup>121</sup>き<sup>122</sup>こ<sup>123</sup>ま<sup>124</sup>き<sup>125</sup>を<sup>126</sup>拵<sup>127</sup>り<sup>128</sup>て<sup>129</sup>ま<sup>130</sup>る<sup>131</sup>ア

○花<sup>132</sup>美<sup>133</sup>の<sup>134</sup>表<sup>135</sup>形<sup>136</sup>ま<sup>137</sup>付<sup>138</sup>て<sup>139</sup>ま<sup>140</sup>き<sup>141</sup>こ<sup>142</sup>ま<sup>143</sup>き<sup>144</sup>河<sup>145</sup>ま<sup>146</sup>ま<sup>147</sup>事  
拵<sup>148</sup>り<sup>149</sup>ま<sup>150</sup>き<sup>151</sup>こ<sup>152</sup>ま<sup>153</sup>き<sup>154</sup>の<sup>155</sup>表<sup>156</sup>形<sup>157</sup>ま<sup>158</sup>付<sup>159</sup>て<sup>160</sup>ま<sup>161</sup>き<sup>162</sup>こ<sup>163</sup>ま<sup>164</sup>き<sup>165</sup>河<sup>166</sup>ま<sup>167</sup>ま<sup>168</sup>事  
ま<sup>169</sup>き<sup>170</sup>こ<sup>171</sup>ま<sup>172</sup>き<sup>173</sup>を<sup>174</sup>拵<sup>175</sup>り<sup>176</sup>て<sup>177</sup>ま<sup>178</sup>る<sup>179</sup>ア  
○花<sup>180</sup>美<sup>181</sup>の<sup>182</sup>表<sup>183</sup>形<sup>184</sup>ま<sup>185</sup>付<sup>186</sup>て<sup>187</sup>ま<sup>188</sup>き<sup>189</sup>こ<sup>190</sup>ま<sup>191</sup>き<sup>192</sup>河<sup>193</sup>ま<sup>194</sup>ま<sup>195</sup>事  
拵<sup>196</sup>り<sup>197</sup>ま<sup>198</sup>き<sup>199</sup>こ<sup>200</sup>ま<sup>201</sup>き<sup>202</sup>の<sup>203</sup>表<sup>204</sup>形<sup>205</sup>ま<sup>206</sup>付<sup>207</sup>て<sup>208</sup>ま<sup>209</sup>き<sup>210</sup>こ<sup>211</sup>ま<sup>212</sup>き<sup>213</sup>河<sup>214</sup>ま<sup>215</sup>ま<sup>216</sup>事  
ま<sup>217</sup>き<sup>218</sup>こ<sup>219</sup>ま<sup>220</sup>き<sup>221</sup>を<sup>222</sup>拵<sup>223</sup>り<sup>224</sup>て<sup>225</sup>ま<sup>226</sup>る<sup>227</sup>ア  
○花<sup>228</sup>美<sup>229</sup>の<sup>230</sup>表<sup>231</sup>形<sup>232</sup>ま<sup>233</sup>付<sup>234</sup>て<sup>235</sup>ま<sup>236</sup>き<sup>237</sup>こ<sup>238</sup>ま<sup>239</sup>き<sup>240</sup>河<sup>241</sup>ま<sup>242</sup>ま<sup>243</sup>事  
拵<sup>244</sup>り<sup>245</sup>ま<sup>246</sup>き<sup>247</sup>こ<sup>248</sup>ま<sup>249</sup>き<sup>250</sup>の<sup>251</sup>表<sup>252</sup>形<sup>253</sup>ま<sup>254</sup>付<sup>255</sup>て<sup>256</sup>ま<sup>257</sup>き<sup>258</sup>こ<sup>259</sup>ま<sup>260</sup>き<sup>261</sup>河<sup>262</sup>ま<sup>263</sup>ま<sup>264</sup>事  
ま<sup>265</sup>き<sup>266</sup>こ<sup>267</sup>ま<sup>268</sup>き<sup>269</sup>を<sup>270</sup>拵<sup>271</sup>り<sup>272</sup>て<sup>273</sup>ま<sup>274</sup>る<sup>275</sup>ア

たれぬ若くは流の言似分とする人を諱ふ世俗の  
替若くは似も口前必を得ても白く得得る一  
こゆのう

○右生花秘長枝意花は秘心乃事花秘り等の中  
きひうこの意味は是を新一語意を以て後を著る  
その之を秘意をのり後よ消さたら花秘り秘  
を違つと京大板と外西真高紀と南勢力と危

ツキ 四

おまを赤府の方ありをみ及りより所社  
公得のたれもここの一をさとうりすま  
寛政四年壬午年のもろ二月赤府に新松林寺  
富居の月日光山一やり芝樹院より名一七  
ふまをうけす

○此堂ありたる久の風平屋ゆまの二月の申  
こ名付る系稿ゆりまると中法園の門社

よむ種しりまハ秋心社乃ためゆえしとすし  
めよりて春心も又年終生のすも面意もゆた  
かき進ハ進歩入たのよ下刻して月の中  
乃ゆらるるよあゆみとゆらゆらゆらも  
秋懐中よ心ゆくゆらと志すり

寛政丙辰年八月 廿六日坊主



ツキ ④五

